

共同研究奨励金グループ活動報告

東アジアにおける近代探偵小説の誕生（2004年度の活動）

1. 2004年3月における調査について

予算年度では昨年のものであるが、昨年度の所報刊行以後の活動であったため、記しておくこととする。2005年3月15日から10日間の日程で、研究代表者である鈴木陽一が北京、南京、上海において北京大学、北京社会科学院文学研究所、南京大学、江蘇社会科学院文学研究所、上海師範大学などを訪問し、それぞれの機関の研究者と探偵小説研究について意見交換を行った。また、一部ではあるが資料の共同調査も行った。

このとき、上海師範大学の潘建国教授が鈴木に同行し、討論、調査に全面的な協力を行った。なお、潘教授は近代文学の専門家で、近年小説など通俗文学の隆盛と上海の出版業の発展について目覚ましい業績を挙げている若手研究者であり、本プロジェクトの中国における最も中心的な研究パートナーである。

2. 2004年5月10日における研究者招請と座談会の開催

潘教授は中国の近代文学、特に探偵小説などの通俗文学を掲載した雑誌が日本に大量に所蔵されていることから、その調査を強く希望していた。そこで、氏自身の調査と、日本側の研究者との意見交換のため、共同研究奨励費で招請し、本学で氏の講演と座談会を開催することとした（以下、参照）。また、雑誌を多く所蔵する東洋文庫、東大東洋文化研究所、横浜開港資料館などで資料調査を行った。

3. 資料収集と目次の作成

共同研究の資料として、最近日本で復刊されている1920～30年代の探偵小説、あるいは娯楽雑誌を購入している。また、中国に関しては、探偵小説以外にそのバックグラウンドたる上海近代の資料を系統的に購入している。さらに研究メンバーがコピーしてきた中国語の雑誌『偵探世界』のなかに納められた小説の目録を作成中である。

4. シンポジウムの開催

2005年3月19日、20日の両日、上海師範大学において日中両国の近代文学、近代史などの研究者が集いシンポジウムを開催する。このシンポジウムは本プロジェクトの一つの結節点となるもので、その成果の刊行を予定しているが、それで終わりとせず、東アジアの近代における大衆文化、或いは都市文化の研究という大きなテーマを掲げたより豊かで、総合的な研究の第一歩としたいと考えている。

多文化共生社会の創出と日本社会の変容 — 神奈川県横浜地域を中心に —

1. 共同研究メンバー

横倉節夫、大里浩秋、孫安石、尹亭仁、永野善子、後藤政子、後藤晃、兼子良夫、寺沢正晴、平井誠、富永玲子、阿部浩己、福元雄一郎

2. 研究目的

1990年代から、いわゆるニューカマーと呼ばれる在日外国籍住民の増加がみられるが、首都圏とくに神奈川県横浜地域でも顕著になってきている。こうした新しい状況の中で、在日外国籍住民の増加と定住化が日本社会の変容を促す要因として機能してくると共に、「共生」をめぐる課題が今後日本社会のあり方を規定する主要な問題の1つとして登場してきている。こうした問題意識から、本研

究は、神奈川県横浜地域を中心に、外国籍住民の状況と諸問題や、日本住民との経済的社会的文化的葛藤・交流の実態調査を通じて、多文化共生社会創出の可能性と地域社会の変容を解明し、今後の日本社会のあり方を考察しようとするものである。

3. 2004 年度の研究活動経過

本年度は共同研究グループの発足年であることから、9月に合宿を行い、メンバー間の問題意識の交流を行った。これによって、メンバー間の多様な視点からの問題やテーマについて相互に理解を深めるとともに、共通する問題意識の確認を行った。これについて、10月及び05年1月に2回、ヒアリング中心の調査活動を行った。この調査活動によって、横浜市の行政施策及び外国籍住民の生活実態について理解を深めた。また、3月下旬には国際シンポジウムを開催予定である。これらを基盤として次年度では具体的な調査研究を行う予定である。

加齢による認知機能変化の評価と、環境設計に関する研究 — サクセスフル・エイジングのために —

採 択 額：3,500 千円

研究期間：2 年間（平成 16 年度・平成 17 年度）

研究代表者	和氣洋美	外国語学部 教授	人文学研究所
研究分担者	三星宗雄	外国語学部 教授	人文学研究所
	山下昭子	外国語学部 教授	人文学研究所
	堀野定雄	工学部 助教授	工学研究所
	森みどり	工学部 助手	工学研究所
	後藤智範	理学部 教授	総合理学研究所
	張 善俊	理学部 専任講師	総合理学研究所

研究の進捗状況

1. 研究会：ネット会議多数回

2. 研究装置開発：高速視覚刺激発生装置(Viserge)

平成 16 年 5 月末 発注

平成 16 年 10 月末 納品

プログラム作成中

触図提示装置

平成 16 年 5 月より 設計に関する打ちあわせ開始

平成 17 年 1 月 設計企画最終打ちあわせ 発注

3. ロービジョンに関する研究

オクルージョン・ホイル装着により視力を段階的に低下させ日常生活の各種状況（調理、買い物など）における動作の困難度と視力との関係について解析